



〰〰〰〰〰〰〰〰

2013年度 オムニバス講義（ユニット3担当）「変容する仏教Ⅰ」

- 報告題目：造形作品からみる滋賀・長命寺穀屋とその周辺
- 開催日時：2013年6月21日（金）9:00～10:30
- 場所：龍谷大学深草学舎 22号館 103教室
- 報告者：松岡久美子（龍谷大学龍谷ミュージアム講師）
- コメンテーター：根井 浄（龍谷大学非常勤講師）
- 参加者：66人

【報告のポイント】

長命寺は西国三十三所の三十一番目の札所であり、琵琶湖の東岸に位置している。長命寺の門前に存在する穀屋寺は、長命寺と関わりの深い尼寺である。松岡久美子氏は、長命寺穀屋で発見された「長命寺参詣曼荼羅」「観心十界曼荼羅」の調査によって得られた成果を通して、寺院が時代の変化にどのように対応し、存続していったのかという点に関して考察を加えた。

【報告の概要】

報告の導入として、松岡氏は穀屋寺と、穀屋寺所蔵「観心十界曼荼羅」「長命寺参詣曼荼羅」の概要について説明を行った。元々、穀屋は勧進等で集めてきた物を集積・管理していた場所であって、長命寺穀屋の場合も、勧進集団が拠点とした施設であったと考えられる。長命寺穀屋は開基を慈芳、中興の祖を慈白としているが、江戸時代には慈芳を重視する西穀屋と、慈白を重視する新興の東穀屋に分裂していたとされる。現在の穀屋寺本堂には西に慈芳像、東に慈白像が安置されているが、これは東西穀屋を意識した配置であろう

と松岡氏は述べた。

「観心十界曼荼羅」の主要なモチーフは「老いの坂」「地獄の有様」「施餓鬼供養」などである。熊野比丘尼が絵解きの際に使用したため、女性に関わる地獄が多く描かれている。通常、「老いの坂」の下には立った姿の阿弥陀三尊が描かれるが、穀屋寺本だけは坐像が描かれている。これは、長命寺の三仏堂を意識したものであろうと松岡氏は指摘した。また、穀屋寺所蔵の「観心十界曼荼羅」には規則的に皺がついているが、これは全国を勧進して回った熊野比丘尼たちが折り畳んで持ち歩いた証拠である。通常、後代に掛け軸に改変されることが多いが、穀屋寺では折り畳んだまま漆塗りの箱に入った状態で保存されていた。

また、その折り目の状態から「観心十界曼荼羅」と「長命寺参詣曼荼羅」が同じ箱に入れられ、これらがセットで勧進に使用されていたことが分かる。この折りたたみ寸法・表具の形状から、「観心十界曼荼羅」「長命寺参詣曼荼羅」は三つのグループに分類でき、東穀屋・西穀屋・長命寺、それぞれで使用されたと考えられる。中でも「長命寺参詣曼荼羅」長命寺本は、セットとなる「観心十界曼荼羅」を伴わない。これは、長命寺の寺僧が、絵解きの際に女性と関わりの深い「観心十界曼荼羅」を使用しなかったためと考えられる。

1707年に長命寺の寺僧と穀屋の尼僧の間で取り交わされた「長命寺条目」によると、穀屋が持っていた寺院修復の資金管理や勧進による資金集めなどの権限を、長命寺の寺僧に取り上げられてしまったことが分かる。これは、中世的な勧進集団としての痕跡を引きずっていた穀屋が、そのあり方を否定されたことを意味し、流動的な人々を寺院体制の中に組み込もうとする社会全体と動きに対応したものと考えられる。長命寺穀屋もまた、幕府の寺院体制の中に組み込まれ、流動的な組織ではなく、「穀屋寺」という独立した寺院として成立したといえる。そして寺院維持の資金調達も、西穀屋は幕府の大奥、東穀屋は膳所藩に依存するようになり、勧進という中世的なあり方から檀家や藩主に資金援助をしようという形に変化していったと松岡氏は述べた。

以上、本報告は新たな資料が発見された際に如何にしてその成果を利用していくのか、その方向性を提示し、現存する美術資料を通して、社会の変化に対応して変化していく寺院のあり方について提示するものであった。

【議論の概要】

根井浄氏は、日本仏教史の中の「勧進活動」について整理を行った。仏像や寺院が焼失・荒廃した際、それを修理復興するためには多くの資金が必要になる。その資金を集めるために寺院が行う経済行為の一つに「勧進」がある。東大寺の大仏建立の際に助力した行基、東大寺大仏焼失後に再興活動を行った重源・西行、そして清水寺荒廃後に再興活動を行った願阿などは、大仏や寺院の復興のために諸国を勧進してまわった僧である。寺院などが焼失・荒廃した際、それを修理修復しようという運動が起こり、それを担当したのは寺院の中にある勧進組織であったといえる。

勧進を行う際の有効な手段として、「観心十界曼荼羅」などの絵画を制作して絵解きし、

人々の信仰を刺激するという方法がある。これを担当したのが比丘尼である。近年、日本仏教史研究においては、勧進活動に関わった比丘尼が注目されている。例えば、熊野神宮・出雲大社・箱根大社・厳島神社などにも、本願所・穀屋と呼ばれる勧進を行う組織があった。中でも伊勢神宮の勧進運動の中心となったのは、慶光という尼僧であったと根井氏は述べた。

また日本の寺院には、学問を推奨するグループと寺院を維持するグループの二つのグループがあり、彼らによって寺院は経営されてきた。松岡氏の報告は、長命寺を維持してきた人々に関する話であり、その中でも比丘尼の活動に注目したものであったといえる。長命寺にも勧進をする尼達がいたということは、日本仏教史における勧進組織の典型的な例

であったということができると根井氏は述べた。

最後に、根井氏は勧進の際、絵解きに使用された「観心十界曼荼羅」などについて、これは鑑賞するためではなく、内容が説明されるところに意味がある、所謂「唱導絵画」という性格を持った絵画であり、勧進を行う僧尼によって持ち運ばれた「移動する絵画である」と述べた。



2013年度 オムニバス講義（ユニット3担当）「変容する仏教Ⅱ」

- 報告題目：葬式仏教の歴史と現在
- 開催日時：2013年6月25日（火）9:00～10:30
- 場所：龍谷大学深草学舎 22号館 302教室
- 報告者：碧海寿広（BARC 博士研究員）
- コメンテーター：中西直樹（龍谷大学文学部准教授）
- 参加者：103人

【報告のポイント】

本報告では、日本における葬式仏教の歴史が概観され、また近現代の日本で見られた葬祭文化の変容の諸相について具体的な事例に基づき解説された後で、仏教と葬儀の現在における関係のあり方について述べられた。

【報告の概要】

古代の日本においては僧侶が葬儀に積極的に関わることはあまりなく、「穢れ」により忌避された遺体が河原などに打ち棄てられる場合が多かったとされる。中世になると、「穢れ」を恐れぬ律僧や念仏僧などの遁世僧が、民衆の葬儀に熱心に関与するようになり、葬式仏教の基礎が次第に確立していった。江戸幕府が敷いた寺請制度（寺檀制度）は、この葬式仏教の日本社会への定着を決定的なものとした。人の死後に戒名を付与し、「ホトケ」として扱うようなふるまいが、日本列島に暮らす住民にとって一般的な風習となっていた。近代以降とりわけ戦後になると、葬儀の際の布施や「戒名料」の高額化など、葬式仏教はそれ特有の問題を抱えることになったが、いまなお多くの日本人にとって馴染みの深い文化として存続しているといえる。

近代化の過程において、日本の葬祭文化の様相もまた大きく変化した。近世における葬儀の中心的なパートは葬列であったが、大正期以降、都市部では交通事情の変化などから次第に葬列が廃止され、かわって霊柩車による遺体の運搬や、祭壇の前での別れの儀式が葬儀式を構成する主要な部分となっていた。さらに近年ではこうした「伝統的」な葬儀のあり方も相対化されつつあり、散骨（自然葬）の台頭、小規模の家族葬の増加、火葬だけでセレモニーを省く直葬（ちょくそう）の普及など、従来とは異なる葬送のかたちが目立つようになってきた。また葬制と密接に結びついた墓制にも変化が見られ、期限付きの非継承墓や、墓石を立てず墓地に花や木を植える樹木葬、遺骨を墓ではなく遺族の身近で保持する手元供養の習俗などが、徐々に広まりつつある。

現在、葬式仏教は様々な困難を抱えている。上記した布施の高額化などがしばしば批判の対象となり、葬祭儀礼の商業化という問題に直面しているのみならず、そもそも葬儀を仏教式で行うこと自体が、日本の少なからぬ人々にとって自明の慣習ではなくなりつつある。仏教界もこうした現状をただ傍観しているわけではなく、一部の有志の僧侶たちが葬儀改革を通じた仏教改革を試みたり、あるいは東日本大震災の被災現場でボランティア的な供養の実践に取り組んだりするなど、葬式仏教の復興に向けた動きも随所で見られる。日本仏教はこれから葬儀や死者儀礼といかに関わり、それを人々がどのように受けとめていくのか、今後の状況の推移が注目される。

【議論の概要】

中西直樹氏は、まず仏教は生病老死という「苦」とどう向き合うのかという点を一貫して課題としてきたことを指摘した。その上で、日本仏教は「死」に特化して、道教的、儒教的な要素を介在させて独自の葬儀文化を形成しつつも、葬儀を通じて「苦」と向き合う姿勢を日本人に定着させてきたことも否定しえない。その意味において、葬儀は死や苦というものを考える場であり、父母兄弟の法要を通して、人間存在のあり方を問うという考え方が伝統的にあったと考えられる。ところが近年の葬祭文化の変化を見ると、そういうものが失われてきている。こうした状況にあって、仏教が今後日本人の意識の変化にどう対応していくのかという点が問題になると中西氏は述べた。

藤能成氏は、現在の日本人の中には非宗教的な葬儀をしたいという人々も多く、彼らは「死んだら終わり」「現世がすべて」という考えを持ち、また多くの日本人がそう考えるようになってきていると指摘した。また日本人の宗教離れが進んでいることに危機感を感じるとともに、仏教に関わる者として果たすべき仕事があるのではないかとと思うと藤氏は述べた。

また藤氏は、親鸞が「往生即成仏」という教義を打ち出し、それによって「死んだら仏になる」という受け止め方が一般化したのが、その動きとは別に遁世僧や念仏僧などの間にも同様の考え方があったのかという質問を行った。碧海氏は、親鸞自身もまた遁世僧であるという見解もあると述べた。「死ねば仏」という考え方は真宗以外にもあり、中世において遁世僧や念仏僧が活躍する中で広まっていった。特に「死ねば仏になるので、死は穢れたものではない」というメッセージを強く打ち出したのが、念仏系の団体であったと碧海氏は答えた。

フロアからは、初期仏教においても死は穢れと認識されていたのかという質問がなされた。碧海氏は、日本においても縄文時代などに遡ると、死は穢れと見なされていなかったと述べた。平安時代、天皇制・貴族制の成立とともに清浄な存在が作り上げられていく中で、差別すべき存在というものが認識されて穢れ意識が広がっていった。穢れ意識をどうにかしようと活動したのが仏教者であり、それによって葬式仏教が広まっていったと歴史的には理解できると碧海氏は答えた。

また、親鸞自身は「父母に対して念仏したことはないし、自分が死んでも葬儀をする必要がない」と言っているが、現在の浄土真宗が葬儀を行っているのは正しいことなのかと



いう質問がなされた。碧海氏は、親鸞の生きた時代は葬祭文化自体が根付いていなかったことも考慮する必要があると述べた。現在、人は死んだときに丁重に葬送してもらう「葬送権」を持つと考える団体もあり、葬儀自体が無くなることはない。ただし、現在の葬式仏教、大々的なセレモニーがどうなっていくかという問題は依然として残っていると碧海氏は答えた。



2013年度 オムニバス講義（ユニット3担当）「変容する仏教Ⅲ」

- 報告題目：中国において撰述・編集された經典について
- 開催日時：2013年7月12日（金）15:00～16:30
- 場所：龍谷大学大宮学舎清和館3階ホール

- 報告者：宮井里佳（埼玉工業大学人間社会学部教授）
- コメントーター：大内文雄（龍谷大学文学部教授）
- 参加者：60人

【報告のポイント】

『金藏論』は、6世紀後半に道紀によって編纂された、類書の形式を持つ因縁譚の集成である。中国の経録には掲載されておらず、唐末～五代頃に散逸し、『義楚六帖』などの記述から僅かにその存在が知られるのみであった。日本では『今昔物語集』のソースとなり、これまで日本文学の分野では注目されていた。宮井里佳氏は、『金藏論』のような仏教類書を中国仏教史の中にどのように位置づけていけばよいのかという点について、仏教学・仏教史の観点から考察を加えた。

【報告の概要】

報告の導入として、宮井氏は『金藏論』の概要と現存の写本・刊本について写真を提示しながら解説を行った。『金藏論』の写本・刊本は日本・朝鮮・敦煌に現存し、トルファン写本も存在したとされる。6世紀後半に編纂された後、少なくとも朝鮮半島において版本が刷られた13世紀まで東アジア各地域に広がっていた、重要な仏教類書であると宮井氏は指摘した。

仏教類書とは、様々な仏教經典から重要な文を引用抄出して、テーマ（類）ごとに収録・編集した書物であり、読書・作文の利便のために作られ、知識を集成・分類して体系化するものである。宮井氏は『金藏論』がこの仏教類書の形式を取っているという点に注目し、まずその出典について整理を行った。『金藏論』韓国梵魚寺本の巻頭目次によると、『金藏論』に収録されている物語はみな因縁譚であり、その出典もまた『譬喻經』・『賢愚經』・『百緣經』などの譬喻經典である。『諸經要集』・『法苑珠林』・『義楚六帖』には、『金藏論』をソースとする物語が収録されており、唐末以降に作られた仏教類書に転用されていることが分かる。『金藏論』は北周の廃仏を契機として編纂されたため、第一章の「邪見縁」では仏教を迫害した人々がどのような悪い報いを得るのかということ述べている。また、因縁譚を一般人に伝え、仏教の教えを解説していくという編纂の意図もうかがえる。このような『金藏論』はアジア各地で読まれており、中国では物語として展開していき、日本では仏教文学に影響を与え、説教節などの日本芸能にも影響を与えた。

次に宮井氏は、『金藏論』のような仏教類書を中国仏教史の中にどのように位置づけていけばよいのかという点に関して、所謂「疑經・偽經」の問題を中心に述べた。船山徹氏は、漢文で書かれた仏典を漢訳・疑經・漢訳編輯經典の三種に分類している。漢訳編輯經典とは、サンスクリット・パーリ語原典がなく、中国伝統の儒教思想（特に「孝」精神）、民俗・民間信仰、道教などを取り入れたものである。つまり漢訳編輯經典とは、すべてを中国で作成したわけではなく、一部はサンスクリット・パーリ原典に存在するが、それを中国に

において抄出・編纂したものであるといえる。『金藏論』もまた漢訳編輯經典に分類することができるが、こうしたものを一概に「疑經・偽經」として分類してもよいか疑問が残ると宮井氏は述べた。また最後に宮井氏は、經錄・僧伝・類書の作成は密接な関係を有し、6世紀初頭にはほぼ軌を一にして編纂され始めている点については注目すべきであり、仏教知識を総合していこうという動きの中で、『金藏論』のような類書のあり方も考察していくべきであると指摘した。

以上、本報告は『金藏論』という仏教類書を具体例として、中国撰述の經典類の果たした役割とその背景について明らかにするものであった。

【議論の概要】

大内文雄氏は、本報告の内容は現在進行形の研究進展の最中にある課題であると述べた。そもそも類書には、仏教的な類書、道教的な類書、一般的な類書があり、一般的な類書は更に性格によって細かく分類することができる。仏教類書のみならず、類書がどのような世界観を持っているのかという点は重要な問題であり、その編目構成に注目すべきである。道紀が『金藏論』を唱導の種本として便利なものとして作ったならば、必ず編纂意図があるはずである。彼が因縁譚をどのような順番でどのような意図を持って編纂したのか、その編目に性格が表れているはずである。『金藏論』は朝鮮・日本文化の基層に大きな影響を与えた非常に大きな意味を持つ類書であり、これを類書全体の中にどう位置づけていくのかという点は重要な課題であると大内氏は述べた。

また大内氏は、『法苑珠林』や『経律異相』などと比較して、『金藏論』の構成にはどのような相違点があるのか、『金藏論』に収録された因縁譚には悪因悪果に関する説話が少ないのはなぜかという質問を行った。

宮井氏は、『法苑珠林』・『経律異相』などは中国の一般世界の類書同様に、仏教世界のすべてを大系づけて説明しているが、『金藏論』は異なっていると述べた。『金藏論』は仏教類書の形を取りながら類書ではなく、因縁譚の集成である抄經類であり、要文集であると



いえる。また、『金藏論』には確かに悪因悪果にまつわる話は少なく、難しい教理の話ではなく、仏教を誹謗してはいけないということや護法するとどれだけ良い功德が得られるかということを中心に述べている。これは、仏教の世界観を表しているというよりは、布教を重視しているためであろうと宮井氏は述べた。



2013年度 オムニバス講義（ユニット3担当）「変容する仏教Ⅳ」

- 報告題目：初期真宗の本尊にみえる東アジア仏教世界
- 開催日時：2013年9月27日（金）10:45～12:15
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼 102 教室
- 報告者：安藤 弥（同朋大学文学部准教授）
- ファシリテーター：中西直樹（龍谷大学文学部教授）
- コメンテーター：高橋事久（龍谷大学文学部教授）
- 参加者：35人

【報告のポイント】

仏教に対する様々な信仰形態の一つとして、仏に対して礼拝するという方法がある。浄土真宗の場合、礼拝対象となる「本尊」は阿弥陀如来であるが、親鸞以降、鎌倉・南北朝・室町時代の日本社会へ浄土真宗が広がっていく中で様々な礼拝対象が生まれている。その礼拝対象の中には、日本のみならず広く東アジア世界が表現されている。

安藤弥氏は、浄土真宗の本尊の一つである光明本尊に注目し、そこに表現された世界観を通して、グローバルな展開を見せていた日本中世仏教の実像について報告を行った。

【報告の概要】

報告の導入として、安藤氏は真宗本尊の展開について整理を行った。親鸞は阿弥陀如来を本尊とし、その表現形態として絵像・木像ではなく「名号」を重視した。しかし親鸞の死後、弟子達は阿弥陀如来や名号だけではなく、聖徳太子や祖師の絵像なども本尊として掲げて礼拝対象とした。これに対して覚如は最も中心となる礼拝対象は名号であるとし、また蓮如は阿弥陀如来・名号を重視するなど、親鸞への回帰を図った。蓮如は当初、十字名号「帰命尽十方無碍光如来」を使用しようとしたが、比叡山から批判を受けて六字名号「南無阿弥陀仏」へと切り替え、これを紙に書いて信者一人一人に配った。こうして集まった真宗信者がともに信仰儀礼を行う場所が道場であり、そこには絵像本尊が掲げられていた。その道場が江戸時代には寺院となり、本尊として絵像ではなく木像を安置するようになる。これが真宗本尊の展開であると、安藤氏は写真を提示しながら解説を行った。

次に安藤氏は多様な展開を見せた初期真宗の本尊の中で、光明本尊について写真を示しながらその概要を述べた。光明本尊には、阿弥陀如来を始め釈迦如来、勢至菩薩や龍樹・天親などインド（天竺）の高僧、中国（震旦）の高僧、そして聖徳太子や親鸞など日本（本朝）の高僧たちが絵像として描かれている。これはインド発祥の仏教が中国を経由して日本へ伝わったとする三国仏教史観を表現したものであり、当時イメージされていた疑似東アジア仏教世界である。三国仏教史観は実態ではないが、このようなイメージの創出自体が歴史的な営みとして注目すべきものであると安藤氏は指摘した。特に、龍樹・天親は菩

薩と同じ姿で描かれており、人間としてのリアリティが無くなっている。これは、中国の向こう側にある仏教発祥の地として、イメージ世界のインドを描いたものといえる。

最後に安藤氏は、誰が光明本尊を礼拝していたのかという点について論及した。初期真宗における信仰の担い手には、農民や武士の他に、商人や山の民・川の民など「移動する人々」などが存在した。彼らが礼拝対象としたのが光明本尊である。彼らは移動先で、この疑似東アジア仏教世界を広げて礼拝していた。都など先進地域ではない一地域において、東アジアというグローバルな世界を容易に看取することができた点は、注目すべき事象であると安藤氏は述べた。

以上、本報告は初期真宗の展開とその特徴について、光明本尊という現存する資料を通して考察し、仏教のグローバルな展開とその多様性を明らかにするものであった。

【議論の概要】

高橋事久氏は、真宗史研究においては、常に真宗が我々の歴史社会にどういう意義を与えるか、またそれがどのように世俗化していくかという点について、親鸞の教えと対比させながら考えることが大切であると述べた。そうした視点から見ると、覚如・蓮如の行った「親鸞への回帰」も、親鸞と全く同質のものと捉えることはできないと高橋氏は指摘した。また光明本尊に学智・恵慈が描かれる点からやはり朝鮮仏教が日本仏教に影響を与えていたことが分かり、三国仏教史観ではなく東アジア全体から現代的視点で仏教を見ていく必要があると高橋氏は述べた。

安藤氏は、歴史は必然性を持って変容していくので、覚如・蓮如もまたそれぞれの課題の中で親鸞への回帰を提唱したと答えた。また、光明本尊に描かれる三国仏教史観はあくまで作られた世界であり、仏教は中央アジア・東南アジア・朝鮮半島を含むグローバルな展開を見せている。現代的視点で東アジア仏教全体を見ていく必要があるという点は、指摘の通りであると安藤氏は答えた。

倉本尚徳氏は、光明本尊に観音菩薩が描かれていない理由について質問を行った。安藤氏は、聖徳太子が観音菩薩の化身とされるので、聖徳太子を描くことで観音菩薩の存在を表していると考えられると答えた。

下間一頼氏は、光明本尊は移動性があるので絵画として作成されたのか、また親鸞が名号本尊という「文字」を本尊として使用したのはなぜかという質問を行った。前者について安藤氏は、絵像に限らず聖徳太子などの木像を持ち運んでいた例もあり、一概にそうとは言えないと答えた。後者については、当時は宋の仏教においても墨跡という表現手法が展開しているので、親鸞がそれを摂取していた可能性があるという点で答えた。

赤松徹眞氏は、光明本尊は絵画として分かりやすく表現される一方で、賛が添えられており、伝道の際には論拠説明をしながら利用されたのであろうと述べた。そこには、仏教の教えを言説化して説明し、聞く者がそれを受容していくという往復的な関係があったと考えられる。つまり、光明本尊は単なる礼拝対象ではなく、教えを伝える語りの場として

存在し、更にそれが異動していくという点が重要であり、絵画的な視点に止まらずに考察することが大切ではないかと赤松氏は述べた。

安藤氏は、今回の報告では教えを伝える場として光明本尊のあり方については触れることができなかったので、今後の課題としたいと答えた。



2013年度 オムニバス講義（ユニット3担当）「変容する仏教Ⅴ」

- 報告題目：中国三階教は異端か
- 開催日時：2013年10月30日（水）13:15～14:45
- 場所：龍谷大学大宮学舎東翼101教室
- 報告者：西本照真（武蔵野大学人間科学部教授）
- ファシリテーター：佐藤智水（龍谷大学客員教授）
- コメンテーター：大内文雄（龍谷大学文学部教授）
- 参加者：87人

【報告のポイント】

三階教とは、中国南北朝時代末期から隋代にかけて活躍した信行（540～594）を開祖とする中国仏教の一派である。浄土教と対立しながら数百年間活動を行っていたが、600年以降、5回にわたって国家の禁圧を被り、9世紀半ば以降に衰滅した。西本照真氏は、三階教の展開について解説し、「認悪」「普敬」という三階教の教えが示す、仏教の現代的可能性について言及した。

【報告の概要】

報告の導入として、西本氏は三階教研究の嚆矢となる矢吹慶輝『三階教之研究』（岩波書

店、1927)の紹介を行った。三階教は日本には宗派として伝わっておらず、今日我々が三階教について詳細に学ぶことができるのは矢吹氏の功績によると西本氏は述べた。

三階教の開祖信行は、広義の末法思想と如来蔵・仏性思想を基礎として三段階の教え「三階仏教」を提唱した。三階とは、仏陀の生きた時代である第一階「好世界好時好衆生」、第二階「悪世界悪時好時不定衆生」を経て、信行が生きた時代を第三階「悪世界悪時悪衆生」とする考え方である。第三階の衆生は自己を徹底して肯定し、自己と関係ない他者を徹底して否定するという、いわば「自己肯定と他者否定」という病を抱えた人々である。これを解決するため、三階教では「自己否定(認悪)」「他者肯定(普敬)」という実践が行われ、最終的には認悪・普敬を乗り越えた「空観」に到達しなければならないとされた。このような教義の実践として、三階教は「他者」を礼拝対象として人間礼拝を行った。また、他に五十三仏・三十五仏・二十五仏なども礼拝対象であり、地論宗の影響が指摘されることがある。西本氏は、現代社会においては自己顕示ばかりを行って他者を貶める傾向が強く、自らの行いを真摯に見つめ、他者を謙虚に敬い尊厳を認めていくという三階教の思想は現代的な意味を持っていると指摘した。

次に西本氏は、三階教は都市型仏教であると述べた。当初、信行は鄴や相州を中心とした地域で活動していたが、589年に隋の功臣である高潁によって長安に招かれ、長安の三階五寺などを中心に長安周辺の地域においても広く活動を行った。ただし他宗派とは一線を画し、たとえ同一寺院で活動していたとしても、三階教徒は壁を隔てた「三階院」を作っていた。こうした点もまた、三階教が異端の烙印を押される原因であったと西本氏は述べた。また三階経の活動の一つとして、無尽蔵院による経済活動がある。長安化度寺に置かれた無尽蔵院には喜捨によって多くの財宝が集まっており、それは寺院や經典の修復、恵まれない人々への給付のために使用された。このような三階教には、徐々に国家から弾圧を加えられるようになる。信行死後、600年以降に弾圧が繰り返されたが、数度の三階教弾圧にはそれぞれ個別の事情があったと西本氏は解説した。

最後に、西本氏は「三階教は異端か」という点について言及した。そもそも「異端」という言葉は曖昧なものであり、三階教は誰にとって異端だったのか、またどういう意味で異端だったのかという点について検討する必要がある。三階教徒は「信行は釈尊が説きえなかったことを説いた」として信行を釈尊の上に置いたため、仏教ではないという批判を受けた。また、浄土教からは三階という設定自体が仏教徒としての作業の域を超えているという批判があった。ただし、信行はあくまで仏語に依って、自らが生きる時代に行うべき事を実践しようとしたと西本氏は述べた。

【議論の概要】

大内文雄氏は、なぜ三階教が衰退して浄土教が生き延びたのか、また三階教における尼寺にも三階院のように他から隔絶した施設が存在するのかという質問を行った。西本氏は、浄土教が生き延びた要因については、三階教が隋代に急激に広まった新興仏教であるのに

対し、浄土教は長い伝統を持ち、広く民衆にも浸透していたことが影響しているかもしれないと述べた。また、三階教徒の中に尼がいたことは確認できるが、尼寺の中に三階院のような施設が混在していたかどうかは分からないと答えた。

入澤崇氏は、三階教は地藏信仰と関係が深いが、仏像造形にはどのようなものであるのかという点について質問を行った。例えば浄土教では善導が浄土図作成に関与し、それによって民衆との接点を持っていたが、三階教は具体的に民衆との繋がりを持つことができなかったために衰退していったという印象を持つ。三階教では徹底した他者礼拝を推奨する一方で、他宗派に対しては壁を設けて排除している。入澤氏はこのような点をどのように理解すればよいのかという質問を行った。西本氏は、三階教の仏像についてははっきりとした資料がないため分からないと答えた。更に三階教が衰滅していった要因については、最盛期である 7 世紀段階には開祖信行とある程度の関わりを残す「信行教」という形で成立し得ていたが、代を経て行くにつれて結集軸が無くなり、他宗に吸収されていったという側面があると指摘した。また、他者礼拝を推奨しながら他宗と関係を断ち切っていくという三階教のスタイルが矛盾を抱えていることは確かであり、こうした点は今後も検討していく必要があると西本氏は述べた。

佐藤智水氏は、中国の家族制との関連の中で、三階教で述べられる「他者」の中に自己の家族は含まれるのか、また「認悪」に対する具体的な実践方法について質問を行った。西本氏は、自己・他者という認識とは別に、三階教団の一員であるという意識があったと指摘した。また認悪については、座禅をしながら自己のものの見方・考え方・行動を見つめていくという実践が行われたと述べた。

藤能成氏は、三階教徒は厳しい実践によって、自分たちは選ばれた人々であるという意識を持っていたのではないかと指摘した。西本氏は、確かに三階教の実践は厳しいものであるが、信行が唾羊僧と呼ばれたようにおとなしいイメージと、その一方で浄土教との批判の応酬を行うという攻撃的な側面の二面性を有していたと述べた。

倉本尚徳氏は、三階教の文献の中に他宗批判のようなものはあるのかという質問を行った。西本氏は、そもそも三階教では様々な經典の寄せ集めが使用されたため、他宗への批判に関する記述は確認できないと答えた。ただし信行の死後、多様な活動が展開していく中で、教団内部の派閥同士で批判の応酬が行われた痕跡はある。また、浄土教文献の中に三階教との論争に関する記述があるため、互いに批判していたことが確認できる一方、華嚴宗など三階教に共感する人々もいたと西本氏は指摘した。

フロアからは、日本における行基の



活動と三階教の関係について、また三階教に対して仏教以外からの批判・共感があったのかという質問がなされた。西本氏は、確かに行基の活動と三階教の活動は似ているが、三階教の影響は明確ではなく、文献として日本に伝わっていたのは確かであるが、宗派として活動していたかは分からないと答えた。また、三階教の經典の中に儒教經典を敬うようにという記述は確認できると述べた。



2013年度 オムニバス講義（ユニット3担当）「変容する仏教Ⅵ」

- 報告題目：契丹（キタイ）と仏教—10～12世紀の騎馬遊牧系国家における展開事例—
- 開催日時：2013年11月27日（水）10:45～12:15
- 場所：龍谷大学大宮学舎清和館3階ホール
- 報告者：藤原崇人（関西大学非常勤講師，東西学術研究所非常勤研究員）
- ファシリテーター：市川良文（龍谷大学文学部准教授）
- コメンテーター：佐藤智水（龍谷大学客員教授）
- 参加者：19人

【報告のポイント】

10世紀初頭、耶律阿保機によって建国された「契丹（キタイ・漢風国号は「遼」）」は、シラムレン流域を現住域とする騎馬遊牧系の政権である。従来、契丹史研究は文献史料の不足から研究が進んでいなかったが、近年、考古学的調査の活発化によって第一次資料が増加し、研究状況は改善されている。藤原崇人氏は現地調査の成果などを踏まえながら、契丹における仏教の受容・展開について報告を行った。

【報告の概要】

報告の導入として、藤原氏は草創期の契丹と仏教の関係について述べた。契丹では、略取ないしは移住してきた農耕民・商人・工匠などを収容するための都市を建設し、そこに仏寺や道観などの宗教施設が建設された。これは契丹人自身の信仰の発露ではなく、治下被征服民に対する慰撫・人心掌握といった政治的意図が大きかったと藤原氏は指摘した。

契丹では興宗（在位 1031～1055）以降、国家規模の仏教事業を展開していくが、その例として『契丹大藏經』の雕造と房山雲居寺石刻の続刻を挙げることができる。契丹には仏教学研究に従事する学僧も多く存在しており、彼らが撰述・作成した章疏類は高麗などを經由して日本にも伝わっている。

また、仏塔の建立事業も国家的な事業として展開している。そのうちの一つである朝陽北塔の地宮ダラニ經幢には、契丹の慈賢が訳出した『大随求陀羅尼』や『仏説金剛大摧碎延寿陀羅尼』が刻まれている。これまで慈賢が訳出した經典が契丹社会にどれほど受容さ

れていたか判然としなかったが、この経幢の存在によってそれが一定の影響を持っていたことが明らかになった。

この地宮のダラニ経幢第一層幢座側面には、八大菩薩のレリーフが刻まれている。これは唐の不空訳『八大菩薩曼荼羅經』に依拠したものである。朝陽北塔の外壁初層には金剛界四仏等のレリーフが配置されており、金剛界四仏に囲まれた朝陽北塔自体が大日如来の表現である。その中心部に法身舍利としておさめられていたのが地宮ダラニ経幢で、これもまた金剛界大日如来の表現であると藤原氏は指摘した。不空訳『八大菩薩曼荼羅經』では八大菩薩の中心に位置する尊格の具体的な名称は挙げていない。しかし、不空が金剛頂経系統の大成者であることを踏まえると、これは金剛頂経系統の最高尊格の「金剛界大日如来」であると想定でき、大日如来と八大菩薩の相関関係は容易に想像することができる。

ところが、地宮ダラニ経幢第二層幢座側面には過去七仏が刻まれている。大日如来と過去七仏の関係は契丹以前の經典や仏像などの作例からは確認できない。しかし、慈賢訳『妙吉祥平等秘密最上觀門大教王經』では、釈迦が過去六仏の助けを得て苦行を捨て、毘盧遮那仏（大日如来）のもとで悟りを開くという構図を提示している。このような大日如来・八大菩薩・過去七仏の相関関係は、朝陽北塔以外にも他の契丹時代の仏塔でも確認できる。

最後に藤原氏は、契丹仏教の側面についてその特徴をまとめた。従来、契丹仏教は教学的には唐代密教の継承であると指摘されてきたが、契丹時代に招いた訳経僧である慈賢の訳出した經典に対する関心・志向も見て取れる。また、後にチベット仏教に繋がるタントラ系の後期密教は、北宋ではほとんど流行しなかったが、契丹ではそれを積極的に受容している。後に元朝においてクビライ・ハンがチベット仏教を導入する。それは契丹における後期密教の積極的な受容・展開が念頭に置いていた可能性があり、契丹仏教のあり方は後代の騎馬遊牧系国家における仏教受容の先蹤と位置づけられると藤原氏は指摘した。

以上、本報告は騎馬遊牧系国家である契丹の仏教受容とその展開について検討するものであり、中国周辺地域における仏教受容とその展開について考察する上で重要な意義を持つものであった。

【議論の概要】

佐藤智水氏は、契丹における国家と仏教の関係のあり方は、大日如来の加護を受けて国家の永遠存在を願うかたちで展開したと理解できるが、そのような信仰が民衆の生活と直接結びつくのか、また契丹文字による仏教表現はあったのかという質問を行った。

藤原氏は、過去七仏・八大菩薩に対する信仰は現世利益という側面があると答えた。五胡十六国時代以降、過去七仏と並べて弥勒像が安置される例が多いが、契丹では弥勒像がほとんど見られない。これは、契丹では未来より現在に対する関心が強かったといえると藤原氏は述べた。また、契丹文字で表現された仏典などは存在しない。ただし「漢字」は当時の東部ユーラシアにおける国際言語であり、漢訳仏典のみを使用しているからといってそれが直接「漢化」とは結びつくわけではないと藤原氏は指摘した。

市川良文氏は以下三点について、質問を行った。一点目は、契丹仏教と北宋仏教の関係性、二点目は、契丹の学僧は他地域からやってきた僧なのかという点、三点目は、唐代では法身舍利というと縁起法頌と理解されるが、それが金剛界大日如来などを法身舍利とする理解がいつ頃から出てくるのかという点である。

藤原氏は一点目について、大蔵經を含めた經典類に関しては、高麗や西ウイグルを通して北宋に流入していると答えた。また、契丹仏教にもわずかながら禅宗の影響が見られるとした。更に、北宋など他地域から国境を越えて契丹へ戒を受けに来るものがあり、このような点からも契丹と北宋の関係を見出すことができると藤原氏は述べた。二点目について



では、契丹の学僧は契丹の領域内にいた漢人と契丹皇族出身者がほとんどであり、外部からやって来た者もいるが詳細は不明であると答えた。三点目については、朝陽北塔の最上階に法舍利頌が刻まれているため、これが法身舍利だと分かる。このような理解は朝陽北塔の事例が初見かもしれないと藤原氏は述べた。



2013年度 第1回 中国仏教石刻研究会 [ユニット3 (東アジア地域班)]

- 報告題目：安村道俗一百餘人修塔記
- 開催日時：2013年4月27日(土) 14:00～17:00
- 場所：龍谷大学大宮学舎仏教史学合同研究室
- 報告者：桐原孝見(龍谷大学大学院)
- 参加者：8人

【報告の概要】

「安村道俗一百餘人修塔記」

この碑は東魏天平4年(537)の年号を有し、河南省新郷市獲嘉県にあったとされる。縦56センチ、横73センチの横長の石碑で、中央に小さな仏龕があり、向かって右側に銘文が刻まれている。銘文から、この碑が作られる以前から当地に尼寺があり、大きな塔像が存在していたことが確認できる。年月が経って塔像の痛みが激しくなってきたため、「獲嘉県安村」の道俗100人あまりが集まって100日かけてこれを修復したという。「道俗」という表現から、この事業に出家者が関わっていた様子が看取できる。また銘文の冒頭では、自